

日本短角種の放牧適性、泌乳能力の高さを活用すると、黒毛和種胚移植子牛を放牧育成できる

研究のねらい

日本短角種(短角)は放牧適性と泌乳能力が高く、子牛の発育は放牧下でも優れるが、販売価格が低いことは依然として問題である。短角牛群に市場価値の高い黒毛和種(黒毛)の胚移植(ET)を行い、短角を代理母とした黒毛子牛の放牧育成技術を開発する。

成果の内容

- ①短角母牛を借腹として放牧地で分娩、親子放牧するET黒毛子牛は、飲乳量の過多による下痢などの体調不良はなく(写真1)、舎飼いで黒毛母牛に育てられる同血統の子牛より発育が優れ、特に生後1カ月齢までの日増体量は著しく高い(図1)。
- ②短角母牛と親子放牧したET黒毛子牛における初期発育の優位性は放牧終了の9カ月齢時まで維持される(図2)。



写真1 哺乳中の短角母牛とET黒毛子牛

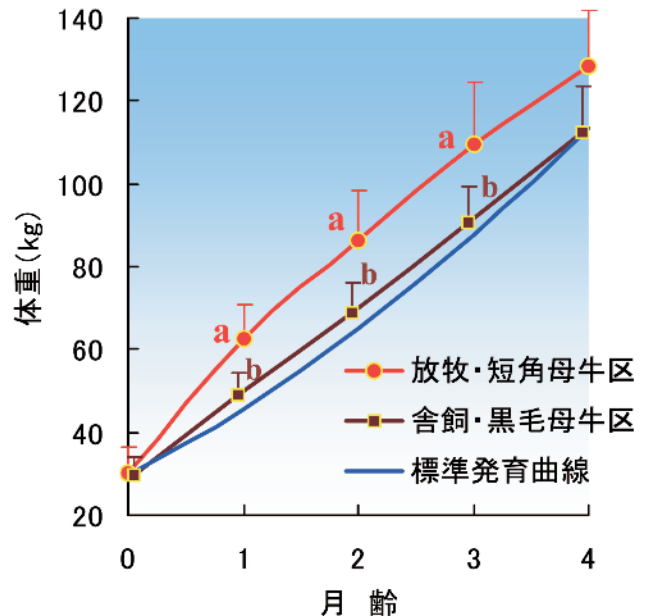


図1 各黒毛子牛の初期発育
 平均値+標準偏差
 同月齢の異符号間に有意差あり(a-b: P<0.05).

〔標準発育曲線:
 日本飼養標準・肉用牛(2008年度版)より〕

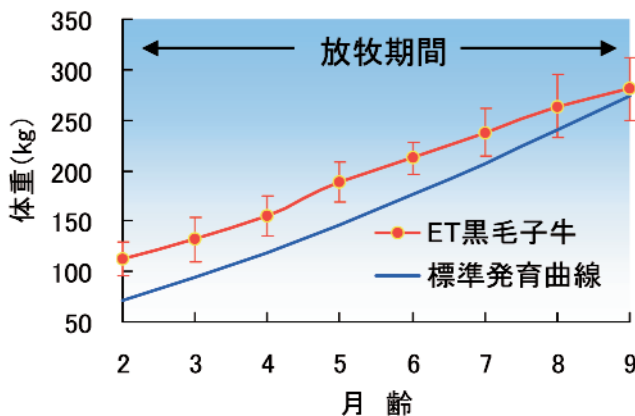


図2 放牧期間中のET黒毛子牛の発育
 平均値±標準偏差

成果の利活用

- ①短角牛の放牧飼養へのET黒毛子牛の導入、ならびに放牧することによる黒毛子牛生産の低コスト化により、短角牛生産地域の収益性向上と経営の安定に貢献する。

